住民との共考、共創アプローチによる
対馬の農村地域と獣害対策の未来可能性の考察

〇大川康太*・安部澪*・東穂千裕*・中道妃香*・齊藤ももこ**・黒田曉***・濱崎 宏則***
* 長崎大学環境科学部　** 一般社団法人 daidai　*** 長崎大学総合生産科学域（環境科学）

国立大学法人 長崎大学 NAGASAKI UNIVERSITY

研究の概略

研究の目的は「対馬の農村地域がこの先、どのように有害鳥獣問題と向き合い、自然との共生環境を構築していけばよいのか、そしてそれに誰が取り組むのか」という問いに対する一定の答えを見出すことである。本研究では、高校生を対象にした捕獲隊活動のスタディツアーと、捕獲隊長を対象にしたワークショップを実施し、未来世代への継承と捕獲隊の地域間の繋がりという縦と横の2つの軸から今後を展望する。

調査方法

1.**聞き取り調査**　10地域の捕獲隊
女連・佐須奈・佐賀・津柳・上槻・内院・吉田
大綱志多浦・佐護・大浦を対象に実施した。

写真１　聞き取り調査の様子

写真２　スタディツアーの様子

写真３ くくり罠の見学

写真4　試食したジビエ(調理前)

2.スタディツアー(2024年11月16日実施)
対馬高校の生徒5名を対象に、一般社団法人daidaiの協力のもと獣害問題と現状を学ぶツアーを開催した。イノシシや被害状況を直接見てツアー参加前後でアンケートを実施した。将来を担う若者をターゲットにしたスタディツアーの意義と効果を調査する。

3.ワークショップ(2024年12月21日実施)
捕獲隊長を対象に、捕獲隊同士の横の繋がりを深め、地区ごとだけでなく、島全体で獣害に向き合っていくための場を設ける。

結果・考察

スタディツアーの前後で実施したアンケート調査の結果から、今後は直接的または間接的に獣害の問題に関わっていきたいといった意識の向上が見られた。

- スタディツアーの効果を広げていくには？
- 若い世代の当事者意識を育むしかけ作り
- 担い手の層を掘り下げる

①リッカートスケールから見る意識の変化

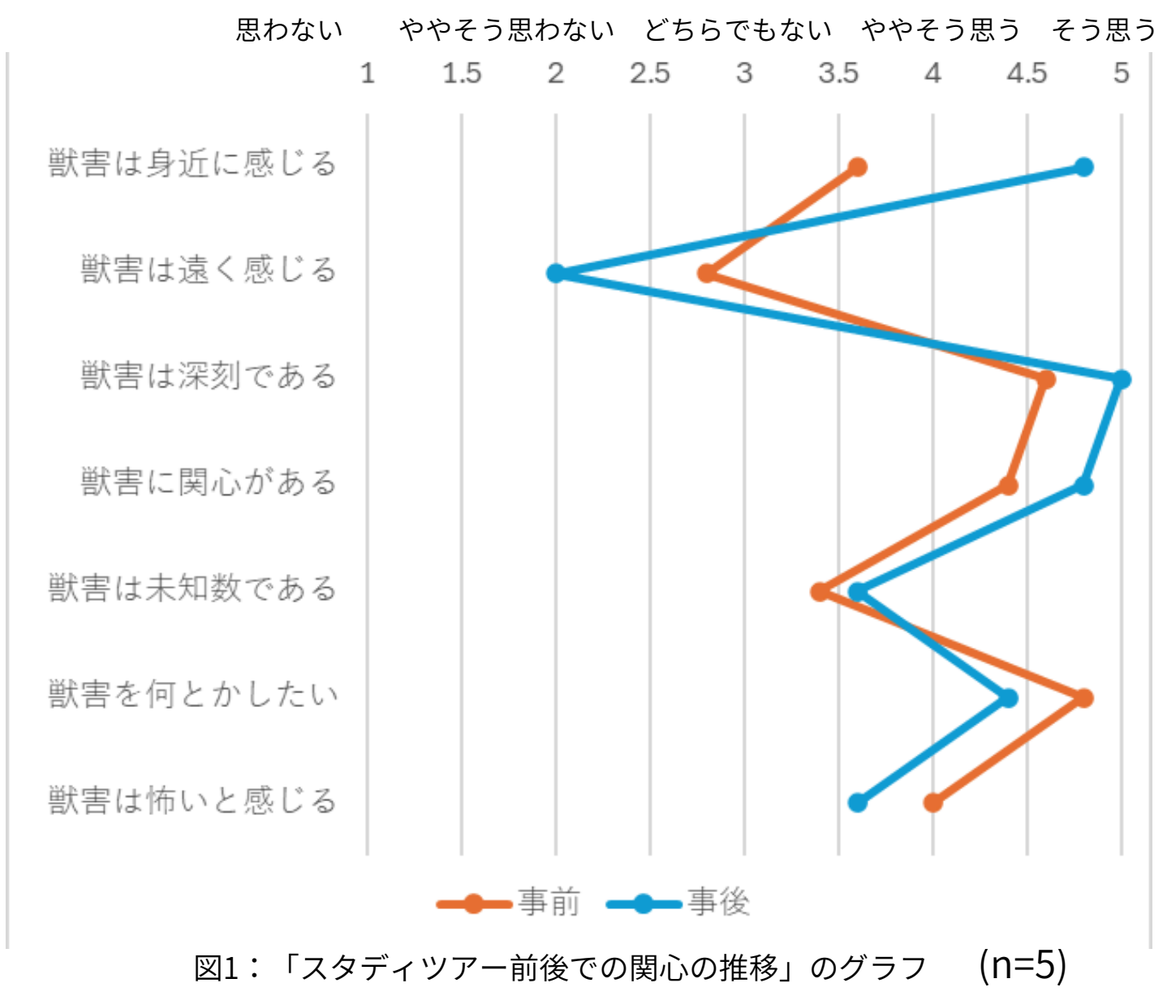

図1：「スタディツアー前後での関心の推移」のグラフ　(n=5)
※獣害に興味がある人を対象にツアーを実施したためバイアスがかかっている

②インタビュー調査への回答

出身	ツアー前	ツアー後	ツアー前後の変化
A 島内	獣害だけでなく島内全体の環境問題に興味がある	ゴミのポイ捨てがイノシシが土を掘り返す原因になることがわかった	殺すことに抵抗はあるが人が**安全に生きていくためには必要**
B 島内	あまり接触する機会がないためじかに体験したい	一次被害だけではなく**二次被害にも興味を持った**	直接的には難しいが**間接的にかかわっていきたい**
C 島外	自分も狩猟免許を取ってハンターになりたい	ハンターさん一人での活動は大変そう	**1人で捕獲活動をすることの大変さを知った**
D 島外	鳥獣による被害について総合的な学習で調べているので知りたい	獣害を引き起こしている**原因の中に私たちもいる**ことに気が付いた	鳥獣への対策だけでなく、地域住民を巻き込んで解決する必要があると感じた
E 島外	ジビエに興味があり解体を見てみたい	止め刺しを見てハンターに興味を持った	狩猟免許を取ってハンターと**一緒に活動してみたい**

表１　インタビュー調査結果

〇分析①リッカートスケールから

五感を通じて獣害に向きあい、当事者意識が向上した。
全体を通してポジティブな意見が多かったが、
イノシシを見て怖いと感じる人もいた。
→安全だけでなく参加者の不安にも配慮する必要がある

〇分析②インタビュー結果から

実際の体験が新たな興味関心に繋がる。
- 食害で土砂が海に流れるなど二次被害に興味を持つ人がいた。
- 体験を通して視野を広げることができた。

獣害問題の展望

「スタディツアー」

【キーワード】
縦の繋がりを広げる
【課題・改善点】
- 関わるハードルをどう下げるか
- ロールモデルの紹介
  →具体的な関わり方を提示

【ポイント】
地域の大人たちが、若い人にも獣害問題に関わることができるアクションの入り口を示していくことが重要。

ツアーのモデル
- 獣害についての説明
- 下草の観察
- 区長からの説明
- くくり罠、はこ罠見学
- 止めさしの見学
- ジビエの試食

「ワークショップ」

【キーワード】
横の繋がりを深める
【課題・改善点】・担い手の不足
- 関わる人をどのように増やすか

【ポイント】
- 地域間の隊員の相互出動の地域間協力
- 連携や地域を支える制度改革
- サブ隊員のような捕獲隊に入る敷居を下げる制度の必要性

写真5　聞き取り調査の様子

謝辞

調査にご協力いただいた皆さまに心より感謝いたします。ありがとうございました。